様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０７９２

研究課題名（和文）教育環境別にみるニューカマーの子どもたちの能力実態の解明

研究課題名（英文）The Actual Condition of the Ability of Newcomer Children in various educational environments

研究代表者
二井　紀美子（NII, Kimiko）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０５４９９０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：教員や担当者の観察だけに頼ると、発達の遅れなどの問題を見過ごしてしまう危険があることが示唆された。外国人児童生徒に適用可能なアセスメントの検査手法は限られているけれども、さまざまなアセスメントツールを使用することの有益性やアセスメントの重要性を確認することができた。また、形容詞の習得率に関して在日ブラジル人の子どもたちは、日本人やブラジルで育つブラジル人に比べ低いことが明らかとなった。その要因は、言語的特徴の影響よりも、家庭や学校・保育園などの教育環境の質の問題が大きいのではないかと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Only through teacher's observation, there is the danger to overlook the problems such as a developmental delay of foreign children. Although the methods of assessment for foreign students are limited, there are benefits of using a variety of assessment tools. It was revealed that the acquisition rate of adjectives of Brazilian children in Japan was low, compared to that of Japanese in Japan and Brazilian grown up in Brazil. It is considered that the educational quality of the home and school environments has a greater influence than the linguistic characteristics.

研究分野：教育学

キーワード：アセスメント　在日ブラジル人　語彙調査　日伯比較

１．研究開始当初の背景

ニューカマーの子どもたちへの研究関心は、ブラジル人の問題を中心に 1990 年代半ば以降高まってきた。さらに 2009 年秋の経済不況に伴い、ブラジル人学校の授業料を支払えなくなった子どもたちが退学し、そのまま不就学に陥るケースが続出した。しかし、不就学においては「就学していない」という現時点での在籍状況のみに問題が焦点化されており、「日本の学校でもブラジル人学校でもどこでもいいので在籍していればよい」とする理解は、不就学児向けの支援施策をはじめ各所で散見された。ところが、半年以上学習しながらも、ほとんど学習効果が見られない不就学児向け学習教室が存在したことから、「在籍していること」に意味があるのではなく、「実際にどのような能力を身に付けられたか」を問うべきであり、教育の質を改善するためには、アセスメントが必要ではないかと考えるに至った。

そこで本研究の申請時に 2010 年に不就学やブラジル人学校に在籍するブラジル人の子どもたち（主に 5～10 歳）38 人を対象とする予備調査を行ったところ、「母語と日本語ともに最も中途半端に習得している状態(ダブルリミテッド)と思われる状態は、不就学の子どもに多くみられた」、「不就学児童は言語性知能のほか、動作性知能や社会性にも発達遅滞の傾向が見られたが、少数ではあるが目立った発達の遅れを示さない子どもも存在した」などが明らかとなった。この結果を踏まえ、調査時点で就学しているか不就学かという在籍状況だけで区別するのではなく、それまでにどのような教育機関でどれくらい教育を受けてきたかという教育歴を重視し、まず子ども一人ひとりのアセスメントを行うことで、ニューカマーの子どもたちの能力実態を明らかにする必要があると考え、本研究を申請した。

２．研究の目的

申請時、ブラジル人の子どもたちの教育経験（どこで教育をうけたか、その期間、家庭の教育状況、友人関係等）を基に、日本語・母語（ポルトガル語）能力、教科理解度、社会性や知能発達度を測り、教育環境と能力発達の相関関係を明らかにすることを目的とした。しかし、教育経験だけをみてもその把握方法が確立しておらず正しく把握することが難しいことが調査開始と同時に明らかになり、さらに調査方法の検討を重ねた結果、具体的な研究目的を①ニューカマーの子どもたちのアセスメントの枠組みや方法の提唱すること、②主な対象を小中学生から幼児期の子どもたちに変更し、幼児の言語能力・社会性･心理発達の実態解明､の 2 点とした。本研究の特色は、日本語の能力をはじめとする学力面だけではなく、社会性や心理発達の度合いを測定することで、子どもの能力実態を複合的・立体的に把握することが可能という点にある。これは、これまでにない画期的なデータをもたらすものである。従来の研究が日本語の能力把握やエスノグラフィーを基にした個の「物語」として捉えられる傾向が強いことに比べ、本研究では、子どものもつ能力の個体内バランスを明らかにすると同時に教育機関がもつある程度の集団的傾向を導くことができる。つまりこれまで個別的・経験則的にイメージされてきたニューカマーの子どもたちの能力の多様な側面を、実験調査を通して具体的数値を伴ったデータを踏まえて複合的に解析することができるのである。

３．研究の方法

本研究は 2011（平成 23）年から 2014（平成 26）年までの 4 年間で、各種の言語･知能・心理調査の実施を中核とした。それに合わせて、文献資料調査および分析比較のための情報収集を国内外で行った。

(1)　初年度である 2011 年度は、各種調査実施に向けた準備として、文献検討と、調査（検査）方法及び調査項目の検討と作成を中心に行った。それに先立ち、まず現在の公立学校でのアセスメントの状況を把握するために、外国人児童が多く在籍する学校関係者に聞き取り調査を行った。また、ブラジルでの心理検査キットの入手と情報交換、調査のプレ実施を予定していたが、ブラジルでは心理検査キットを購入・使用できるのは心理学専門家に限られるということが現地調査で分かったため、ブラジル版心理検査の実施は中止することとした。

(2)　2 年目の 2012 年度は、2011 年の成果に基づき、静岡県浜松市の認可外保育施設（S 園）に通うブラジル人幼児を対象に、①日本語とポルトガル語の語彙調査、②行動上の問題に関するスクリーニング尺度である「子どもの強さと困難さアンケート」（SDQ－Strengths and Difficulties Questionnaire)、③成育歴調査、④親の教育意識調査、⑤家庭教育環境調査の 5 つの調査を年間を通して行った。①の語彙調査から、いくつかの傾向は読み取れたものの、断定には至らなかった。例えばブラジル人の幼児は、教育・保育期間の長さを問わず、日本人幼児に比べて形容詞の間違いが多い傾向が見られたが、これは「日本に住むブラジル人の子ども」の傾向なのか、「ブラジル本国の子どもも含めたブラジル人」の傾向なのか判断することができなかったため、次年度にブラジルでの語彙調査を実施する方向で調整をした。

また能力把握のアセスメント方法の理論的枠組みについて、論文で発表した。

(3)　3 年目の 2013 年度は、前年度に行った

SDQ 調査の分析と、A 大学附属幼稚園に在籍する日本人幼児に対する語彙調査、およびブラジルのサンパウロ大学附属幼稚園に在籍するブラジル人幼児に対する語彙調査の 3 点を実施した。語彙調査に関しては、在日ブラジル人幼児の形容詞の間違い傾向が、「日本に住むブラジル人の子ども」の傾向なのか、「ブラジル本国の子どもも含めたブラジル人全体」の傾向なのかを明らかにするために、実施した。また調査する形容詞の項目数を増やしたため、日本人幼児に対しても調査を行った。

(4)　最終年度の 2014 年度は、追加語彙調査の実施と、これまでの調査結果の整理・分析を行った。追加で行ったのは、ブラジルのサンパウロ市の公立幼稚園での語彙調査である。前年に行ったサンパウロ大学附属幼稚園（2 園）の結果について、サンパウロ大学教育学部で幼児教育を専門とするキシモト・モルシダ・チズコ教授と意見交流を行い、「サンパウロ大学附属幼稚園は、大学関係者の子弟が多いため、一般の公立園とは大きく異なる部分がある。公立園に在籍するブラジル人幼児を対象に語彙調査を行うことが望ましい」という判断し、追加調査を実施することにした。

４．研究成果

本研究による知見として、次のことが挙げられる。

(1)　日本の学校以外から編転入する外国人児童の場合、以前の学校での状態・成績を知る手がかりがほとんどなく、編転入手続き時の面談で保護者から聞き取る成育歴などの情報に限定されている。そして日本の学校現場では教員や担当者の観察によって経験的に子どもたちの状態を把握することが主流となっており、十分なアセスメントがなされているとは言いがたい状況にある。語彙調査･知能検査(キャッテルCFIT スケール 2)、SDQ、④指導者・調査者の所感の 4 点からアセスメントをした結果、観察を行う者（担当者）の主観だけに頼ると、発達の遅れなどの問題を見過ごしてしまう危険があることが示唆され、多方面からのアセスメントの重要性を確認することができた。ただしダブルリミテッドやセミリンガルの外国人児童生徒に適用可能なアセスメントの検査手法は限られている。文化的背景や日本社会における外国人児童生徒の生活という社会背景の違いが考慮されていないと、能力や発達が不当に低く見積もられてしまう恐れがある。検査キットを利用する場合は、①利用する検査キットの標準化がなされた際にアセスメント対象児に類似した対象が母集団に含まれており、マニュアルにおいて対象例として示されているような検査を用いる、②母国において開発された同様の検査キットを入手し、日本語版との違いを精査した上で実施し、結果解釈にあたっては双方の基準を参照する、③結果の解釈にあたっては、文化的・社会的背景との関わりを詳細に記述し、必ず根拠を明記する、④アセスメント対象児の人種的または文化的背景の側面に精通した検査者・調査者を雇う等の配慮が必要である。

(2)　在日ブラジル人の子どもたちの語彙習得の調査から、一見問題なく言葉を身に付けているように見える子どもたちも、教育経験によって語彙の獲得に違いがあることが分かった。「どれだけの期間、どこに就学している（いた）か」という就学の質を問う立場から、「継続的就学」「断続的就学」「不就学」の 3 つに分類し分析したところ、どの段階の子どもたちでも、会話項目の正答率は、他の名詞・動詞・形容詞と比べ高かった。

いずれの教育機関でも一貫した学んだ経験を有していない「不就学」に区分される児童は、母語と日本語の両言語共に中途半端に習得しており「ダブルリミテッド」に陥る危険性が最も高かった。

また不就学児童とそれ以外の児童とを分け隔てる問題として、学習規律を含む社会性の問題があり、学校を中心とする教育機関での学びを効果的にするためには、言語能力だけではなく、社会性の適切な発達を図る必要性が高いことが示唆された。

(3)　形容詞に関しては、在日ブラジル人の子どもたちの正答率の低さが目立った。表 1 は、6 歳児の形容詞の正答率を比べたものである。「大きい」で代用されやすい「長い」「高い」は、正答率が低かった。

表１　日本の 6 歳児の形容詞の正答率比較

対象者	不就学のブラジル人		ブラジル人学校のブラジル人		幼稚園の日本人
（対象人数）	（7人）		（2人）		（16人）
調査言語	ポルトガル語	日本語	ポルトガル語	日本語	日本語
大きい (grande)	100%	43%	100%	50%	91%
長い (comprido)	0%	0%	0%	0%	82%
高い(alto)	14%	0%	0%	0%	64%
暑い(quente)	86%	0%	100%	50%	91%

また、ブラジルに住むブラジル人の 6 歳児の正答率を調べたところ表 2 の通りであった。「長い」「高い」に関して、日本人幼児に比べると正答率は下がるものの、在日ブラジル人幼児と比べると、高いことが分かる。また、この調査で使用した絵カードは愛知県が作成したプレスクール実施マニュアルに掲載されている 100 語の絵カードであり、「長い鉛筆」「高い木」と回答させるものであった

が、ブラジルの幼児教育関係者の意見に基づき別の絵カードを使ってブラジルで良く使う表現「長い袖 manga comprida」を同じ 6 歳児に確認したところ、正答率は、サンパウロ市公立幼稚園 33%、大学附属幼稚園 A 園 54.5%、同 B 園 83.3%であった。語彙調査に関しては、絵カードの表現力によって、正答率が影響されるので、今回の調査の正答率の数字を一般化することは難しい。しかし、ブラジルの子どもたちに比べ、在日ブラジル人の子どもたちは少なくとも「高い」「長い」などの形容詞の理解が低いことは分かる。

表 2　ブラジルの 6 歳児形容詞の正答率比較

対象者	サンパウロ市公立幼稚園園児	大学附属幼稚園（A園）園児	大学附属幼稚園（B園）園児
(対象人数)	(15人)	(11人)	(6人)
調査言語	ポルトガル語		
大きい grande	100%	100%	100%
長い comprido	7%	18.2%	33.3%
高い alto	13%	36.4%	50%
暑い quente	100%	100%	100%

(4)　ブラジルの絵本 11 作品の中での形容詞の使用頻度を調べた結果、最も多く使われたのは、「grande(大きい)」で 5 作品中にのべ 26 回使用されていた。また、「comprido(長い)」は 4 作品中に述べ 6 回使用されており、ブラジルの絵本の中でも比較的多く使われていることが分かった。それに対し、「alto(高い)」は 11 作品の中では 1 度も使用されていなかった。

(3)および(4)の結果から、形容詞の習得率に関して在日ブラジル人の子どもたちが低い要因として、「ポルトガル語は日本語ほど形容詞を使用しないため、理解度が低い」という説は否定される。つまり、言語的特質の影響よりも、家庭や学校・保育園などの教育環境の質の問題が大きいのではないかと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　5　件）

①二井 紀美子、緩利 誠、在日外国人児童の語彙習得の実態－異なる教育環境間の比較分析を通して－、愛知教育大学教育創造開発機構紀要、査読有、5 号、2015、123－131、
http://hdl.handle.net/10424/6051

②二井 紀美子、ブラジルの絵本で使われるポルトガル語の形容詞、愛知教育大学外国語研究、査読無、48 号、2015、81－90、
http://hdl.handle.net/10424/5807

③二井 紀美子、多文化保育における SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire)の活用、愛知教育大学教育創造開発機構紀要、査読有、4 号、2014、97－104、
http://hdl.handle.net/10424/5658

④二井　紀美子、緩利 誠、 外国人児童生徒支援に資するアセスメントの枠組の提案 ：不就学児調査を通して、生涯学習・キャリア教育研究、査読有、9 号、2013、1－12、
http://hdl.handle.net/2237/19050

⑤二井 紀美子、外国人児童受入れ面接の現状と課題、附属学校外国人受入調査事業の報告書、査読無、3 巻 2 号、2012、65－74

〔学会発表〕（計　1　件）

①二井 紀美子、緩利 誠、外国人児童の支援に資するアセスメントの方法－在日ブラジル人不就学児童を事例にして－、日本比較教育学会第 47 回大会、2011 年 6 月 25 日、早稲田大学（東京都）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ　なし

（アウトリーチ活動）

サンパウロ大学教育学部講演, A Educação Infantil para filhos de “Dekasseguis” (trabalhadores brasileiros) no Japão, 2013 年 9 月 25 日、サンパウロ大学にて開催

成果報告会、2014 年 10 月 25 日、浜松市男女共同参画・文化芸術活動推進センター（あいホール）にて開催

６．研究組織

⑴研究代表者
二井　紀美子（NII, Kimiko）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：30549902

⑵研究分担者
なし

⑶連携研究者
なし